

二〇九 学は理を窮むるより要なるはなし。理窮まれば則ち明を生じ、明なれば則ち守固くして、量宏し。守固ければ、則ち坎壈不遇、挫辱顛倒、一切の困苦の境も、これが沮抑と為す能わざるなり。量宏ければ、則ち鄙猥瑣屑、米鹽蔬菜、一切の厭うべきの務めも、これが病累と為る能わざるなり。吾の流品、ここに於てか定まる。吾の才力氣魄、ここに於てか展拓充擴す。これを以て身を持し、これ以て世に応じ、随いて出で随いて処り、入るとして自ら安んぜざるなし。

録して以て高浦生に示す

學無要於窮理、理窮則生明、明則守固、而量宏、守固、則坎壈不遇、挫辱顛倒、一切困苦之境、不能爲之沮抑也、量宏、則鄙猥瑣屑、米鹽蔬菜、一切可厭之務、不能爲之病累也、吾之流品、於是乎定、吾之才力氣魄、於是乎展拓充擴、以此持身、以此應世、隨出隨處、無入而不自安矣、錄以示高浦生、

【訳】学問において、物事の道理、原理、心理、法則を明らかにすることほど大事なことではない。それができれば、物事を見極める知力、知恵ができる。それができるようになれば、人としての生き方の基本ができ、才能も大きく広がる。そうなれば、たとえ志が実現しなくて不遇であっても、世の中でひどいめにあつても、どんな苦しいことにであつても、それによつて自分がだめになってしまうことはない。自分の力を出すことができれば、はじめで、煩わしく、めんどろなことをやつていても、それで、自分がだめになるようなことはない。

一人の人としての品格の高下は、こういうことで決まるだろう。人の才能や氣力がこういうことで広く大きくなっていくだろう。このような生き方で身を守り、社会の中で生活していくと、どこにあつても落ち着いた生活ができる。

この文章を広島の高浦讓太郎君に書いて与えた

二一〇 粗糲の食、檻褸の衣、此れぞ是れ志士の本分、厭うべきにあらずるなり。

粗糲之食、檻褸之衣、此是志士之本分、非可厭也、

【訳】粗末な食べ物と、粗末な着物、これこそ志を持つ人らしい姿である。嫌がつてはならない。

二一 人の、草木と同じく朽ちざるゆゑんのものは何ぞや。徳立ち名成るにあるのみ。

人之所_レ以_レ不_レ與_二草木_一同朽_レ者何哉、在_二徳立名成_一而已矣、

【訳】人が、草木と同じようには朽ちていかないのはなぜだろうか。人としての生きる力が完成し、人としての誇りを持ち本分を果たすからだ。

二二 徳苟くも立ち、名苟くも成らば、則ち其の世間に処_レるは、宛_レも野鶴_二の鶏群_一の中にあるがごとし。

徳苟立、名苟確、則其處_二世間_一、宛如_二野鶴之在_二雞群_一中矣、

【訳】人としての生きる力ができ、人としての誇りを持って世間で生きているのは、まるで野に住む鶴が鶏の群れの中にいるようにぬきんでているものだ。

二三 我れ竊かに夫の雞犬を觀るに、終日營營として、只一飽を求むるのみ。而して鶴の物たる、清遠閑放、高く雲霄の表を撃つ。其の志固より塵埃を以つてこれに期すべからざるなり。

我竊觀_二夫雞犬_一、終日榮々、只求_二一飽_一、而鶴之爲物、清遠閑放、高擊_二平雲霄_一之表、其志固不_レ可_レ以_二塵埃_一期_レ之也、

【訳】私が自分なりに鶏や犬を見ていると、一日中動き回りただ満腹するだけを探めているようだ。ところが、鶴は清く遠く自由いっぱいに大空高くはばたいている。その高い志は、この世の汚れの中にいて、予期できるようなものではない。

二四 呉蜀は唇齒相倚らざれば、則も以つて国を為すべからざるなり。而して先主の、魏呉の間に屹立するは、特其の信義を以つてのみ。則ち関羽の報、豈に亦已むを得んや。先主は其の信義を主とするも群臣は其の利害を言ふ。宜なるかな当時の議の合はざること。然れども先主のいはゆる信義は、其の実は乃ち亦利害の見なり。是を以つて始め戦ひて終に和し、遲疑定まらざるも、亦怪しむに足るものなし。且つ先主実に信義を主とせ

んか。信義の大、漢室を挟みて魏賊を討つより大なるはなし。而して呉と和すれば則ち以つて掎角と為るべく、呉と和せざれば則ち後顧の虞れありて、進取すべからざるなり。則ち姑く其の私忿を抑へ、君臣の大義を天下に伸ばすは、豈に亦先主の素志ならずや。嗚呼是れ當時の形勢にして、事理甚だ言ひ難きものあり。

呉蜀唇齒不_レ相倚、則不_レ可_レ以爲國也、而先主之屹_レ立乎魏吳之間者、特以_レ其信義也、則關羽之報、豈亦得_レ已焉哉、先主主_レ其信義而群臣言_レ其利害宜哉當時議之不_レ合也、然先主之所謂信義者、其實乃亦利害之見、是以始戰而終和、遲疑不定、亦無_レ足怪者、且先主實主_レ於信義乎、信義之大、莫_レ大_レ於挟_レ漢室而討_レ魏賊、而與_レ吳和則可_レ以爲掎角、不_レ與_レ吳和則有_レ後顧之虞、而不_レ可_レ進取也、則姑抑_レ其私忿、伸_レ君臣之大義於天下者、豈不_レ亦先主之素志哉、嗚乎是當時之形勢、事理甚有_レ難言者一矣、

【訳】呉と蜀は相互に頼り合わなければ、国が成り立たない状態であった。それで、蜀の先主（劉備）は、魏と呉との間にしつかりと存在するためには、信義が第一であった。だから劉備の名將の関羽が、呉の孫権によつて殺された事件もやむを得ないことであつた。先主は信義を重んじたが、臣下は利害を重んじた。當時の議論の合わなかつたことももつともなことである。しかし、先主のいう信義というのは、その実はまた利害の見解があつた。そこで戦いもあつたが、和睦した。しかし、疑い迷つていてなかなか定まらないのも無理はなかつた。

先主信義を第一にしようとした。信義の大きな事は、漢の後継者の意志を持つて、魏を打つことより大きな事はないとしたことである。そして、呉と和睦すればすなわち挟み撃ちとなり、呉と和睦しなければ後の氣遣いがあり、前に進むことができない。それで、しばらくは、自分の怒りを抑え、君臣の道を天下に示すのはまた、先主のもとからの志であつた。ああ、これは、その時の情勢にして、事の道理はなかなか言い難いものがある。

二一五 貧は人をして雅ならしめ、富は人をして俗ならしむ。

貧令_二人雅_一、富令_二人俗_一、 壬戌

【訳】 貧しさは人を優雅に上品にし、富めることは人を卑俗に下品にする。

（文久二年・49歳）

二一六 人は惟骨力あるを要す。苟くも骨力あれば、則ち貧は人をして益固ますますならしめ、富は人をして益仁ますますならしむ。苟くも骨力なければ、則ち貧は人をして沮喪隕穫そそういんかくならしめ、富は人をして驕奢縦恣きょうしやししやうしならしむ。

人惟要有骨力、苟有骨力、則貧使人益固、而富使人益仁、苟無骨力、則貧使人沮喪隕穫、而富使人驕奢縦恣、

【訳】人は氣骨があることが大切だ。仮にも氣骨があれば、貧しさは人をますます確固たる者にし、富あることは人の仁徳をますます高める。仮にも氣骨がなければ、貧しさは人の氣力をなくさせ、苦しませる。富あることは、心がおごつて贅沢でわがままな生き方をさせるだろう。

二一七 大凡草木の花の、春夏温暖の時に開くものは、艷麗繁華えんれいはんかなるも、柔脆じゆうぜいなるを病とす。而るに秋冬寒冷の境に発するものは、雅潔簡澹がけつかんたんにして、挺然ていぜんとして孤立の色あり。

大凡草木之花、開於春夏温暖之時、者、艷麗繁華、病於柔脆、而

發於秋冬寒冷之境、者、雅潔簡澹、挺然有孤立之色、

【訳】だいたいにおいて、草木の花で、春夏温暖のときに開花するものは、華やかでにぎやかであるが、柔らかでもろいことが欠点だ。それに比べて、秋冬寒冷のときに開くものは上品で清らかでさっぱりしていて、回りから抜き出て輝いている。

二一八 貧人の話を聴き、貧人の事を視れば、則ち人をして感激奮勵ふんれいせしめ、又人をして簡淡瓢逸かんたんひょういつならしむ。富人の話を聴き、富人の事を視れば、則ち人をして慢易庸惰まんいようだならしめ、又人をして汚陋鄙俗おろうひぞくならしむ。鄙

聽貧入之話、視貧人之事、則使人感激奮厲、又使人簡淡瓢逸、聽富人之話、

視富人之事、則使人慢易庸惰、又使人汗陋鄙俗、

【訳】貧しさの中にある人の話を聴き、貧しさの中で暮らしている人を見れば、人を感激させ、やる気にさせ、俗事にこだわらないようになる。富める人の話を聞き、富める人の暮らしぶりを見ると、人を慢心させ人をあなどり軽んじるよう

になり、また、心が汚れ卑しく下品にさせる。

二一九 順境を楽ししまざるにあらざるなり。而れども其の志をして廢弛^{はいし}し易^{やす}からしむるを憂う。逆境を苦しまざるにあらざるなり。而れども其の志をして振拔^{しんぱつ}し易^{やす}からしむるを喜ぶ。樂中に憂いあり、苦中に喜びあり。苦樂憂喜の境、畢竟^{ひつきよう}なにか是れ真、なにか是れ実。

非^レ不^レ樂^二順境^一也、而憂使^二其志易^一廢弛^二非^レ不^レ苦^二逆境^一也、而喜使^二其志易^一振拔^二樂中有憂、苦中有喜、苦樂憂喜之境、畢竟那箇是眞、那箇是實、

【訳】順調にうまくいっているのを喜ばないというわけではない。しかし、そのことによって持っている志がゆるんでしまう事を心配するのである。逆境を苦しまないというわけではない。しかし、そのことによって持っている志がますます奮い立たつことは喜ばしいことだ。楽しい中に憂いがあり、苦しい中に喜びがある。苦しみと楽しみ、憂いと喜び、この境は結局何が真実であるのだろうか。

220(17/09/02)

二二〇 是の故に志あるの士の、千古不磨^{せんこふま}の図を抱くものは、其の取捨進退、措置^{そちしゆこう}趣向^{おの}、自ずから庸流^{ようりゆう}と同じからざる者あり。

是故有^レ志之士、抱^二千古不磨之圖^一者、其取捨進退、措置趣向、自有^二不與庸流^一同^二者^一矣、

【訳】だから(苦樂優喜の境は定まらないから)、志ある者が永久不変の人生の目途を抱けば、その人の生きるに際しての取捨、進退、対処などの術、工夫のあり方は、自ずから凡庸な者たちとは異なったものとなる。

二二一 西洋の諸国は、通商を以って国を立つ。其の利を得るは固^{もと}より多し。而るに亦恐らくは病^{へい}を免れざらん。

西洋諸國、以^二通商^一立國、其得利也固多矣、而亦恐不^レ免^二於病^一、

【訳】西洋の国々は、通商立国である。だから、それによって国としては利益は多くなる。しかし反面、おそらくそれによる弊害も免れることはできないだろう。

二二二 利の多きは、以って其の衣服を美とし其の飲食を甘しとし、而して其の居処を飾るに過ぎざるのみ。而れども国家の、永久に廃せざるゆるゑんのものは、固より此にあらざる。

利之多也、不過以美其衣服、甘其飲食、而飾其居處而已矣、而國家之所
以永久不廢者、固不在此、

【訳】儲けの多いということは、それによって衣服を派手にし、飲食を豪華にし、住まいを飾るだけのことである。しかし、国が永久に亡びないためのものは、もとよりこんなところにはない。

二三 利を外国より得る者は、亦病を外国より受く。利病相半す。此れぞ是れ必然の理。

得利於外國者、亦受病於外國、利病相半、此是必然之理、

【訳】儲けを外国から得る者は、また、弊害を外国から受けている。儲けと、弊害は表裏一体だ。これは、当然の理屈である。

二四 其の利を得て未だ病を見ざるに方りては、則ち以って此れにあらざれば、則ち以って国を立つるなしと為す。而れども一旦、利尽き病生ぜば、則ち亦恐らくは臍を噛むの悔いあらん。

方其得利而未見病也、則以爲非此則無以立國矣、而一旦利

盡病生、則亦恐有噬臍之悔、

【訳】儲けを得てまだ弊害を受けていない者は、これでなければ、国は成り立っていないと言うだろう。しかし、儲けが或る程度までいって止まり、弊害がてくると、おそらくほぞを噛む思いで後悔することだろう。

二五 西洋の土、未だ嘗つて茶を産せず、又未だ嘗つて茶を用ひず。其の漢土と通ずるに及びて、始めて茶を用ひ、慣れて以って俗と為る。今日に至れば、則ち殆んど是れ人生に闕くべからざるの具にして、給を漢土に仰ぐ。是の故に漢土の人、一旦通商を謝せば、則ち西洋諸国は困乏の患ひを免れず。

西洋之土、未嘗産茶、又未嘗用茶、及其與漢土通也、始用茶、慣以爲俗、至今日、則殆是人生不可闕之具、而仰給於漢土、是故漢土之人、一旦謝通商、則西洋諸國不免困乏之患、

【訳】西洋の地ではかつてお茶を生産していなかった。又、今まで、お茶を飲用してないかった。それが中国と貿易するようになって、初めてお茶を飲用するようになり、慣れてきて習慣となってきた。今になってみればもう生活に欠かせないものになってきて、中国より供給を受けている。それ故に、一旦中国が貿易を断れば西洋諸国は困ってしまうだろう。

二二六 予、未だ嘗つて西洋の書を読まず、亦未だ嘗つて西洋の俗を諳んぜず。然れども理を以つてこれを推すに、蓋し亦多く此れに類するものあらん。

予未嘗讀西洋之書、亦未嘗諳西洋之俗、然而以理推之、蓋亦多有類此者一矣、

【訳】私はまだ西洋の書物を読んでいない。まだ、西洋の習慣、文化も知り尽くしていない。しかし、理屈をもつて推測してみると、他にも多く似たようなことはあるだろう。

二二七 今夫れ自國の物を以つて、自國の用を弁ず。初めは給を外に仰がずして、盈縮窮通し、皆自ら図を為す。豈に亦自由自便の方ならずや。

今夫以自國之物、辨自國之用、初不仰給於外、而盈縮窮通、皆自爲圖、豈不亦自由自便之方一哉、

【訳】今、自分の国の物で自國に必要な物を調達している。初めは外国に供給を求めないで、余ったり、不足したり、行き詰まったりしながら、それぞれが国内で工夫している。まさに自由で自在のやりかたではないか。

二二八 二南、「国風」の首に居り、而して「関雎」又二南の首に居る。聖人の徳、王道の基なり。然り而して今試みに看るに、更に何の異なるあらんや。

二南居「國風之首、而關雎又居二南之首、聖人之德、王道之基、然而今試看、更有何異、」

【訳】詩経の周南編と召南編は当時の民謡を採取した「國風」の巻の初めにある。また、關雎もまたその詩経の初めにある。聖人の徳は、君子が治める政道の王道である。今それを読んでみると、なんら間違つてはいない。

二三九 夫婦の際は、相い楽しまざるべからざるなり。而るに淫を慮る。相い哀しまざるべからざるなり。而るに傷を慮る。而して窈窕閑雅、貞靜純一、此れぞ是れ閨門の儀則なり。「關雎」一篇の要旨、かくのごときに過ぎず。

夫婦之際、不可不相樂也、而慮於淫、不可不相哀也、而慮於傷、而窈窕閑雅、貞靜純一、此閨門儀則、關雎一篇之要旨、不過如此、

【訳】夫婦の間は、お互いに楽しめばよい。しかし、楽しみにおぼれないこと。また、共に悲しめばよい。しかし、悲しみにうちひしがれないこと。そして、しとやかで美しく上品で、心正しく穏やかなこと、これが夫婦の間の大事なきまりである。詩経の中にある「關雎」一篇の要旨は、まとめるとこのようなことに過ぎない

二三〇 聖人の道は、本甚しくは高く行ひ難きものにあらざるなり。而れども停停当当、不偏不倚。却つて是れ至中至正の道理。

聖人之道、本非「甚高難行之物」也、而停々當々、不偏不倚、却是至中至正之道理、

【訳】聖人の道は、元々はとても高くて実行が難しいというものではない。それは、落ち着いて静かで偏らないことだけだ。これが最も正しいことなのだ